総合

平成二十九年度一般入学試験問題　国　語

享栄高等学校

一

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（解答はすべて解答用紙に記入しなさい。）

「人間は生きものであり、自然の中にある」。これから考えることの基盤はここにあります。これは誰もがわかっていることであり、決して新しいシテキではありません。しかし、現代社会はこれを基盤にしてでき上がってはいません。そこに問題があると思い、改めてこのあたりまえのことを確認するところから出発したいと思います。

まず、私たちの日常生活は、生きものであることを実感するものになっているでしょうか。朝気持よくめざめ、朝日を浴び、新鮮な空気を体内にとり込み、朝食をおいしくいただき……これが生きものの暮らしです。実際にはこんな朝を過ごすのが、現代社会の、とくに都会での生活です。ビルや地下街など、終日人工照明の中で暮らすのが現代人の日常です。これでは生きものであるという感覚は持てません。

生きものにとっては、眠ったり、食べたり、歩いたりといった「日常」が最も重要です。ですから、その日常のあり方を変革し、皆があたりまえに自然を感じられる社会を作ればよいのですが、ここまできた近代文明社会を一気に変換するのは難しいでしょう。

I 、ここでの提案は、まずは一人一人が「自分は生きものである」という感覚を持つことから始め、その視点から近代文明を転換する切り口を見つけ、少しずつ生き方を変え、社会を変えていきませんかということです。一人一人の気持が変わらないまま、たとえばエネルギーだけを脱原発、自然再生エネルギーに転換と唱えても、今すぐの実現は難しいでしょう。しかもそれはあまり意味がありません。自然エネルギーを活用する「暮らし方」が大切なのであり、その基本が「生きものである」という感覚なのです。

近代文明をすべて否定するのではなく、生きものとしての感覚を持てるようにするところから転換をはかろうとするなら、生物学に大事な役割が果たせるはずと考えています。なぜなら私自身この分野で学んだがゆえに、とくに意識せずに「生きものである」という感覚を身につけることができ、日常をそれで生きていけると実感するからです。簡単な例をあげるなら、購入した食べ物が賞味期限を越えてしまったような時でも、それだけで捨てることができません。まだ食べられるかどうか、自分の鼻で、舌で、手で確認します。

鼻や舌などの「感覚」で判断するとはなんと非科学的な、そんなことで大丈夫なのか、もっと「科学的」でなければいけないのではないかと言われそうです。科学的とは多くの場合数字で表せるということです。具体的には冷蔵庫から取り出したかまぼこに書かれた日時をさすわけです。衛生的な場所で製造されお店に出されていると信じ、安全性の目安として書かれている期限を見て、その期間に食べているわけです。それを科学的と称しているけれど、これでよいのでしょうか。①こうした判断のしかたは、私には、自分で考えず科学という言葉に任せているだけに思えます。「科学への盲信」で成り立っているように思います。

もちろん、「感覚」だけではわからないことがたくさんあります。科学を通じて微生物による腐敗や毒物の生成などの危険性を知り、それに対処することは重要です。しかし、賞味期限内であれば危険はなく、それを過ぎたら危険と、数字だけできまるものではありません。科学的な知識があったとしても、毎日の生活の中で自分で病原菌や毒物を検出し、その食べ物が危険かどうかをチェックするわけではないのですから、科学による「保証」の限界を知ることが大事です。

食べ物を自らの手で作ったり、採ったりしていた時代には、安全性については自分で責任を持つしかありませんでした。科学・科学技術のおかげでより進歩した暮らしやすい生活ができるようになり、安全が保証された形で、食べ物が手に入るようになったのはありがたいことです。でも、そこに期限をきめる数字が印刷されるようになると、それに振り回され、それに従うことが正しい暮らし方のようになってしまいました。自分ではまったく科学に触れているわけではなく、時には科学的な考え方をするでもなく、ただ「科学が保証してくれているはず」という雰囲気の中で何も考えずに数字を鵜呑みにしているのです。そうではなく、生きものであることを忘れずに、その力を生かすことが必要であると思うのです。

ネズミやイヌなど他の生きものに比べたら嗅覚などはかなり感度が悪くなっているとはいえ、私たちの五感はよいセンサーです。もちろん、上手に使っていないと鈍くなるので、感度を保つためにも日常その力を生かすことは大事です。科学を知ったうえで、機械だけに頼らず生きものとしての自分の感覚をも活用するのが、私の考えている「人間は生きものである」ことを基本に置く生き方です。科学的とされる現代社会のありようは実は他人任せなので、これは「自律的な生き方」をしようという提案でもあります。

うっかり期限の過ぎたかまぼこをすぐには捨てずに鼻や舌を使うという小さなことですが、一事が万事、この感覚を生かすとかなり生活が変わり、そういう人が増えれば社会は変わるだろうと思うのです。常に自分で考え、自身の行動に責任を持ち、自律的な暮らし方をすることが、私の考える「生きものとして生きる」ということの第一歩です。

日常感覚について考えてきましたが、それにプラスして必要なのはやはり「知」です。「人間とは生きものである」とはどういうことなのか、次に、私が勉強してきた「生命科学」を通して考えていきます（私が専門にしている生命誌は、生命科学を基礎に置いていますが、ここには生きものそのものを見ようとする感覚が抜けていることに気づき生命誌を始めましたので、生命科学への疑問の意をこめて「　」をつけました）。

生命科学というとすぐにＤＮＡや遺伝子など面倒な言葉が出てきますが、すぐにこの言葉を出さず（いずれＤＮＡにも触れることにはなりますが）、まず生きものそのものを見ていきます。難しい話ではなく、図1に描かれていることを実感してほしいのです。扇の形に描き、「生命誌絵巻」[2]と名づけました。この絵はＤＮＡ研究があったからこそ描くことができたものなのですが、まず、ここにいる生きものたちを眺めるところから始めます。

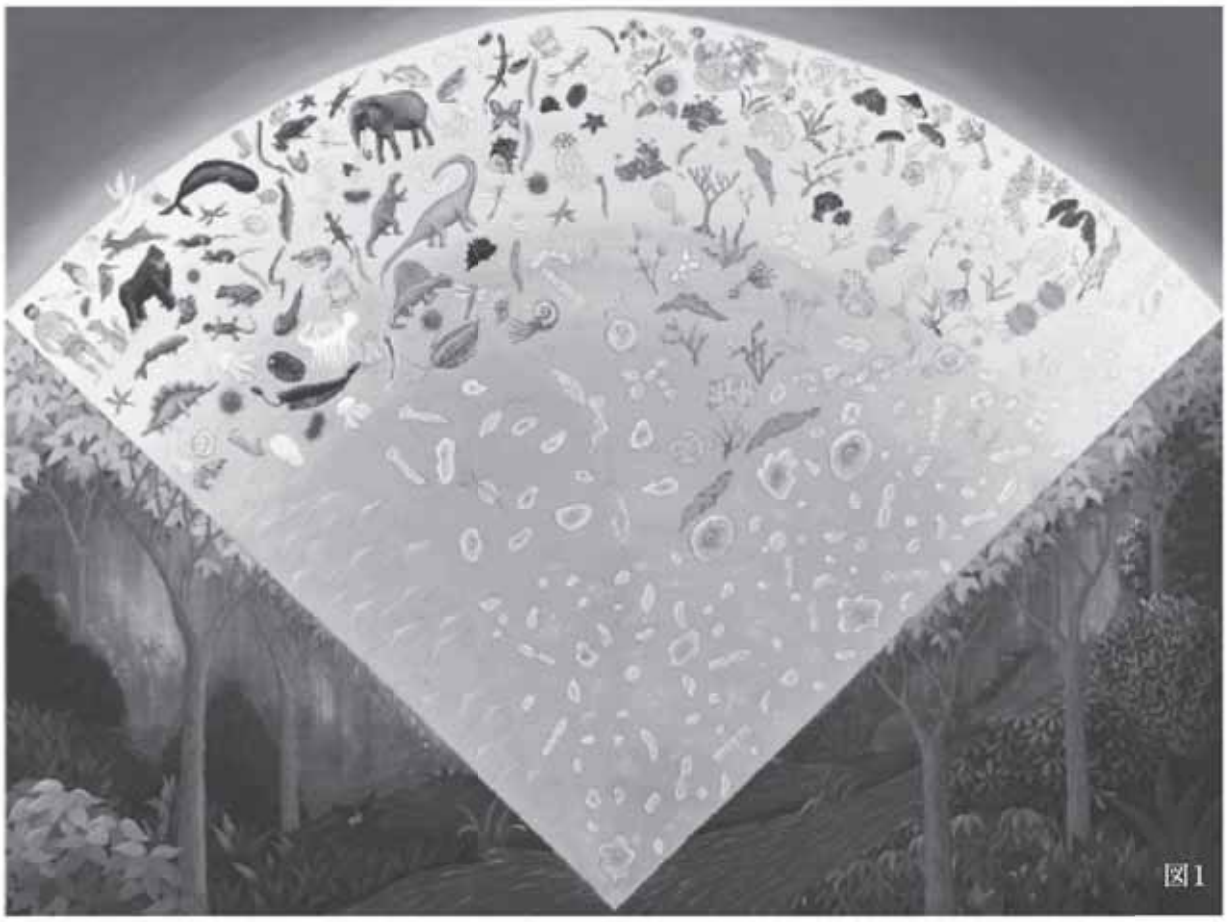

図1　生命誌絵巻．扇の天が多様な生きものが暮らす現在．要（かなめ）は38億年前で地球上の生命体の始まり．すべての生きものが38億年の歴史を持ち相互に関係し合うことを示す．ヒトもその中にいることが重要．（協力：団まりな，画：橋本律子）

扇の天が現在であり、ここには現存の生きものたちが描かれています。バクテリアもいますし、シャジクモがいたりキノコも、植物や動物もいろいろ……大きく分けて五界（原核生物、原生生物、植物、菌類、動物）に分類される生きものたちは数千万種もいるとされています。もちろんここにはそんなにたくさんは描けませんので、代表的なもの（というより身近なもの）だけが並んでいます。シイタケ、ヒマワリ、イモリ、イルカ、カワセミ、ゴリラ……好きなものを探してください。生物学は、これらすべてがゲノム（各生物の持つ細胞内にあるＤＮＡの総体をさし、ここに遺伝情報がある。以下ゲノムと記す）を持つ細胞から成ることを明らかにしています。そしてこれは決して偶然[3]ではなく、地球上の生きものは祖先を一つにしていることを示していると考えています。ここから多様な生きものたちが生まれていく過程を知ることこそ生きものを知ることと考えて、生命誌を提唱しました。ここでは、生きものの構造と機能を知ると同時に長い時間と多様な関係を知ることが重要になります。

最初の生物はどこでどのようにして生まれたのか。これこそ生物学の根本的問いですが、これにはまだ答はありません。地球には水が存在したから生きものが生まれ、今も続いているのだと考えられますので、地球に海ができた時、そこで生きものは生まれたと考えてよいでしょう。もちろん近年、地球型惑星が次々と発見されていますので、宇宙のどこかにある水のある星で生まれた生命体が、地球へやってきたと考えることもできますが、現時点では、地球の海で生まれたと考えるのがオーソドックスです（実はオーソドックスでない考え方から新しいものを生み出してきたのが科学の歴史と言ってもよいので、宇宙飛来説も悪くないなと思ってはいるのですが）。

地球の誕生は四五・五億年前。最初はドロドロに熔[と]けていた地殻が冷え、大陸や海洋ができていくのですが、当初は大きな隕石が衝突[b]をくり返しており、それ

がおさまったのが三八億年ほど前とされています。興味深いことに、この時期の地層の岩石に、すでに生命体由来の炭素（炭素同位体の中で重いものの含量が低い）が存在するのです。Ⅱ、三八億年前にはすでに生きものがいたと考えてよいでしょう。もしそうなら、地球が生きものの存在しうる姿になってからあまり時間がたないうちに、生きものは生まれたことになります。何もないところから生命体が生まれるとしたら、何億年もかかるだろうと普通は思いますが、そうではなさそうなのです。生きものの誕生は、ありそうもないことがたまたま起きたのか、水の存在するところでは起こるべくして起きるような反応の結果なのか。科学としては後者と考える方向になっています。この考え方をすると、水の存在する他の惑星にも、同じような生きものが存在する可能性が高まります。宇宙での仲間探しは今、科学の新しいテーマになっており、宇宙科学、天文学の研究者と生物学者の共同研究が始まっています。その結果はそれほど遠くないうちに出るのではないかと思うと、ちょっとワクワクします。

二〇世紀の半ば、細胞やＤＮＡの研究を踏まえて「生命の起源」を考え始めた頃は、生きものとは無関係の分子からＤＮＡやタンパク質ができる可能性は確率的にとても小さいと考えられていました。ですから地球は恐らく宇宙で唯一の生命体の存在する星だろうとされていたのです。宇宙にたった一つの存在と考えた時、自分がここに在ることがふしぎに思え、生きものの[c]ミリョクを感じました。それから五〇年以上がたち、宇宙・地球・生物の研究が進んだら、どうも地球以外にも生命体がいる星はあるのではないかということになってきたのです。たった一つという感覚から、仲間はどんなものだろうという方向へと関心が移り、今度はそこにふしぎさと期待を感じています。

科学はどんどん変わっていきます。真理に近づこうとはしていますが、今わかったことが最終的な真理とは限らないのはしかたありません。新しいことがわかるとそこでまた新しいふしぎと期待が生まれるのです。この広い宇宙にたった一つの存在だと思って生命の尊さを感じることもあれば、どこかに仲間がいるかもしれないと思って生命のミリョクを感じることもあるわけです。

話が広がってしまいましたが、地球上での生物の始まりを追っていくと、オーストラリアやアフリカに三四億年前のストロマトライト（細菌類と鉱物とが重なり層を作ったもの）の化石が見つかります。これまで述べてきたようなことから考えると、どこで生まれたかは別として、三八億年前には、現存の生きものたちの祖先が海中に存在していたと考えてよいでしょう。ですから、生命誌絵巻の扇の要（かなめ）は三八億年前です。そこに祖先細胞（現存の生物の中ではバクテリアが最も近い）が存在し、三八億年かけてそこからすべての生きものが生まれてきたのです。

この絵巻の語っていることの第一は、祖先は一つということです。これほど多様な生きものが皆一つの祖先から生まれた仲間だというのです。これは現在の生物学の見方の基本となる大事なことです。

次にこの図が扇形であること、つまり要から天までの距離はすべて同じであるということの意味を考えます。それは、天に描かれているバクテリア、キノコ、ヒマワリ、イモリ、カワセミ、リス、ヒト……どれも皆三八億年という時間があって今ここに存在しているということです。この過程を進化と呼びます。

バクテリアが誕生したのは、三十数億年前だったでしょう。しかしその後まったく変わらずにいたのではありません。バクテリアはバクテリアとしてさまざまな能力を

獲得しながら、言いかえれば進化をしながら今に続いています。つまり、今私たちのまわりにいるバクテリアは三八億年という歴史を持つ存在なのです。鳥類の化石として知られている最古のものは一億五〇〇〇万年ほど前のものとされています。絵巻に描かれているカワセミは、その後の鳥の仲間の進化の中で生まれてきたわけですが、最初の鳥類誕生までの進化がなければ存在しないのですから、カワセミの中にも三八億年の歴史があります。リスもヒトも同じこと、すべての生きものが三八億年という時間がなければ今ここには存在しないという事実を忘れてはなりません。

眼の前を小さなアリが這っていると、なにげなくつぶすこともあるのではないでしょうか。でもその時、このアリの中に三八億年という時間がある、それだけの時間があって、このアリはここにいるのだと思ったら、そう簡単にはつぶせなくなります。いのちの重みという言葉には多くの意味が含まれていますが、このとてつもなく長い時間も重みの一つに違いありません。

もっともここで、これほど重いものなのだからどんないのちも失わせてはならないなどときめつけたら大変なことになります。私たちが毎日野菜やお肉を食べていることからも明らかなように、生きものいのちは他のいのちの上に成り立っているものなのですから。ただ、すべての生きものが同じように持つ重みを感じて行動する。これが絵巻から読みとれる二つ目のことです。

第三は、東日本大震災の体験と強く結びつくテーマです。扇の天の左端に（別に端であることに意味はありません、どこでもよいのです）人間がいます。人間を生きものとして見る時、生物学ではヒトと呼びます。リスやゴリラの近くに、しかしヒマワリやキノコやバクテリアともつながった存在としてここにいること、それが「人間は生きものである」という文言の内容です。

人間は、一つの祖先から生まれた仲間であること、三八億年という時間を体の中に持つことという二つの性質を他の生きものと共有しています。「人間は生きものである」という、字面を見る限りあたりまえすぎるほどあたりまえのことを改めて考えようとしているのは、現代社会は私たちがこの扇の中にいるということを前提にしてでき上がっていないからです。

④現在の社会での人間のありようをここに描くなら、扇をはずれた上のほうに置くことになります。他の生きものたちとは別のところ、つまり自然の外にいるという姿です。しかも少し上のほうから眺めて、生物多様性を考えましょうとか、地球に優しくしましょうなどと言っているのです。でもそれは間違っています。「中にいる」。人間は生きものであるということは、他の生きものたちとの「つながりの中にいる」という感覚を持つことです。

野生生物の生活の厳しさは文明生活をしている私たちには想像し難いものです。その中で生きものたち一つ一つは懸命に生きています。そこには闘いがあり、環境からの選択があり、他の生きもののことを思う余裕などありません。［Ⅲ］、その中で特定の生きものだけが残ることはなく、多くの生きものが相互に関係を持ちながら生きる生態系ができ上がってきたのです。

基本的には人間もまた、この生態系というネットワークの中に存在しているのであり、そこから抜け出すことはできません。これは決してマイナスの感覚ではなく、これほど豊かな生きものの世界の一員として生きることの面白さを探しましょうという提案です。

『科学者が人間であること』　中村桂子著　岩波新書

問一　二重傍線部 a「シテキ」 b「衝突」 c「ミリョク」について、カタカナは漢字で、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二　本文中には次の一文が抜けている。この一文を適切な場所に入れた直後の五字を抜き出して答えなさい。（句読点を含む）

めざまし時計で起こされ、お日さまや空気を感じることなどまったくなしに腕の時計を眺めながら家をとび出す……

問三　空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入る語を次のア～クの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　たとえば　イ　また　ウ　しかし　エ　そこで　オ　さらに　カ　つまり　キ　ついに　ク　それとも

問四　傍線部①「こうした判断のしかた」の説明として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　自分の嗅覚を使って食品が安全かどうかを判断した上で、賞味期限の数字も参考にすること。
イ　食品が安全かどうかを自分の五感で判断せず、賞味期限の数字をそのまま受け入れること。
ウ　食品が賞味期限を過ぎていた場合でも、自分の五感の判断を鵜呑みにして安全性を判断すること。
エ　食品の安全性が消費期限の数字で保証されていても、念のために自分の嗅覚でも判断すること。

問五　傍線部②「生命誌絵巻」に描かれているものから読み取れるものとして最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　多様な生きものは、それぞれが別の祖先から進化しているということ。
イ　バクテリアは誕生してから現在まで能力を変えずに進化しているということ。
ウ　生きものの命は重いものなのでどの命も失わせてはならないということ。
エ　人間は、他の生きものと進化の時間や祖先を共有しているということ。

問六　傍線部③「偶然」の対義語を漢字で答えなさい。

問七　傍線部④「現在の社会での人間のありようをここに描くなら、扇をはずれた上のほうに置くことになります。」とあるが、その理由として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　現在の人間は、「人間も他の生きものたちとのつながりの中にいる」という感覚を持たずに生態系というネットワークを傍観しているから。
イ　現在の人間は、「人間は生きものであり、自然の中にある」ということを自覚しながら自然環境を保護できる唯一の存在として考えているから。
ウ　現在の人間は、発達した文明社会の中で、科学技術を駆使しながら他の生きものの絶滅を防ぐ努力を独自に進めているから。
エ　現在の人間は、野生動物とは違った環境で生活をしながらも多くの生きものとのつながりを大切にし、地球を守っているから。

問八　本文の内容に合致するものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　一人一人の気持ちに関係なく、環境のために脱原発や自然再生エネルギーへの転換をただちに実現する必要がある。
イ　自分で考え、行動に責任を持ち、自律的な暮らし方をすることが「生きものとして生きる」ことの第一歩である。
ウ　科学技術がどれだけ進歩しても、真理は変わっていくものなので、今わかっていることが最終的な真理となる。
エ　人間が生態系のネットワークから抜け出せないということは、人間にとって大きなマイナスとなることである。

問九　本文において、「人間が生きものである」ためにはどのような生活を送ることが必要だと述べているか、最も適切なものを次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

ア　ビルや地下街など、終日、人工照明の中において文明的な生活を送ること。
イ　科学的に衛生的で安全だと保証された食品を健康のために食べる生活を送ること。
ウ　他の生きものとのつながりの中にいるという感覚を持った生活を送ること。
エ　遺伝子について研究し、科学をさらに進歩させるよう努力する生活を送ること。

二

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（解答はすべて解答用紙に記入しなさい。）

学校がグライダー訓練所のようになってしまうのも、考えてみれば、やむを得ないことかもしれない。小学校へ入るこどもは、まだ、勉強がよくわかっていない。ものを知りたい気持はあるけれども、どうしたら知識が得られるか、ケントウ(ア)もつかない。

とにかく、先生に言われるように勉強しなさい、となる。ひっぱるものがあるから、動き出す。自分で動くのではない。受身だ。

本来の学習がそうであってはいけないのはわかり切っているけれども、制度としての学校ができてしまうと、各人の自発的な学習意欲を待っているわけには行かない。就学年齢がきまっている。そのときいっせいに学習への準備ができているはずはないけれども、ひっぱるのには、いっせいでないと不便だ。ひっぱられる方は、なぜ、ひっぱられているのかよくわからないままひっぱられる。

このはじめの習慣は学校にいる間中ずっとついてまわる。強化されこそすれ、弱まることはない。そればかりか、社会へ出てからも、勉強とは、教える人がいて、読む本があるもの、と思い込んでいる。 A

学校の最優等生が、かならずしも社会で成功するとは限らないのも、グライダー能力にすぐれていても、本当の飛翔ができるのではない証拠(イ)になる。学校はどうしても教師の言うことをよくきくグライダーに好意をもつ。勝手な方を向いたり、ひっぱられても動こうとしないのは欠陥あり、ときめつける。

教育は学校で始まったのではない。いわゆる学校のない時代でも教育は行なわれていた。ただ、グライダー教育ではいけないのは早く気がついていたらしい。教育を受けようとする側の心構えも違った。なんとしても学問をしたいという積極性がなくては話にならない。 B

そういう熱心な学習者を迎えた教育機関、昔の塾や道場はどうしたか。

入門しても、すぐ教えるようなことはしない。（　a　）、教えるのを拒む。剣の修業をしようと思っている若ものに、毎日、薪を割ったり、水をくませたり、ときには子守りまでさせる。なぜ教えてくれないのか、当然、不満をいだく。これが実は学習意欲を高める役をする。そのことをかつての教育者は心得ていた。あえて教え①惜しみをする。

じらせておいてから、やっと教える。といって、すぐにすべてを教え込むのではない。本当のところはなかなか教えない。いかにも陰湿のようだが、結局、それが教わる側のためになる。それを経験で知っていた。

頭だけで学ぶのではない。体で覚える。しかし、ことばではなかなか教えてもらえない。名人の師匠はその道の奥義をきわめているけれども、はじめからそれを教えるようではその奥義はすぐ崩れてしまう。売家(※)と唐様で書く三代目、というのとどこか似ている。 C

秘術は秘す。いくら愛弟子にでもかくそうとする。弟子の方では教えてもらうことはあきらめて、なんとか師匠のもてるものを盗みとろうと考える。ここが昔の教育のねらいである。学ぼうとしているものに、惜気なく教えるのが決して賢明でないことを知っていたのである。免許皆伝は、ごく少数のかぎられた人にしかなされない。②

師匠の教えようとしないものを奪いとろうと心掛けた門人は、いつのまにか、自分で新しい知識、情報を習得する力をもつようになっている。いつしかグライダーを卒業して、飛行機人間になって免許皆伝を受ける。伝統芸能、学問がつよい因習をもちながら、なお、個性を出しうる余地があるのは、こういう伝承の方式の中に秘密があったと考えられる。

昔の人は、こうして受動的に流されやすい学習を積極的にすることに成功していた。グライダーを［　I　］に転換させる知恵である。

それに比べると、いまの学校は、教える側が積極的でありすぎる。親切でありすぎる。何が何でも教えてしまおうとする。それが見えているだけに、学習者は、ただじっとして口さえあけていれば、ほしいものを口へはこんでもらえるといった依存心を育てる。学校が熱心になればなるほど、また、知識を与えるのに有能であればあるほど、学習者を［　II　］にする。本当の教育には失敗するという皮肉なことになる。［D］

（　b　）、おそまきながら、詰め込み教育への反省がおこる。グライダー訓練の弊害が注意されるようになったのである。詰め込みがいけないのではない。意欲をそぐ詰め込みが悪いのである。勉強したい気持がつよければ、いくらでも知識をカンゲイ[ウ]し、いくらでも詰め込んでもらいたいと願うであろう。逆に拒否反応を示している学習者[3]にとっては、ほんのすこしのことでも、こんなに押しつけられてはたまらないと反発する。

かつて、漢文の素読が行なわれた。ろくに字も読めないような幼いこどもに、四書五経といった、最高度の古典を読ませる。読ませるというのは正確ではない。声を出して朗誦するだけである。先生は意味をご存知だが、習うこどもには、チンプンカンプン、何のことかさっぱりわからない。

（　c　）、漢文の素読では、意味を教えないのが普通で、だからこそ、素読というわけである。いくらこどもでも、ことばである以上どういうことか、意味が気にならないわけがない。しかし、教えてもらえないのだから、しかたがない。我慢する。その間に、早く意味もわかるようになりたいと思う心がつのる。教えないことが、かえっていい教育になっているのである。［E］

いまのことばの教育は、はじめから、意味をおしつける。疑問をいだく、つまり、好奇心をはたらかせる前に、教えてしまう。意味だけではない、文章を書いた作者についてもあらかじめ、こまごまとしたことを教えようとする。宮沢賢治はどういう信仰をもっていたかといったことをいまの高校生は教えられる。それが幸福かどうかははなはだ疑わしい。親切がすぎて、アダになっている。

昔、素読をつけられたこどもたちで、孔子[4]や孟子の伝記を知らなくてはいけないなどと言われることはなかった。

いまの学校教育[5]では、グライダー能力はつけられても、飛行機能力をつけにくいことはすでにくりかえしのべてきた通りである。それにもかかわらず実際には、グライダーを飛行機と誤解する。試験の答案にいい点をとると、それだけで、飛翔力ありと早合点してしまう。これがいかに多くの混乱を招いているかしれない。

考える、ということで、まず、頭に浮かぶのは数学である。与えられた問題の答を出す。これは文章を読んで、その中から知識、情報を引き出すのに比べると、いかにも自発、積極的のように見える。

おおざっぱに言うと、知る活動は、学校の国語科を中心とする読む学習にかかわり、考える活動は、数学を中心とした学習と関係するように考えられている。

数学は思考力をつけるというけれども、問題を与えられて、解答を出すのは、まだまだ受動的である。問題という枠の中でこそ積極的ではあるが、問題そのものは他から与えられたもので、自分で考え出したのではない。学校の数学は、いつも、はじめに問題ありき、である。自分で問題をつくり、それを解くという数学は、普通、

ついに一度も経験することなくして終る。

ギリシャ人が人類史上もっとも輝しい文化の基礎を築き得たのも、かれらにすぐれた問題作成の力があり、〝なぜ〟を問うことができたからだといわれる。飛行機能力がすばらしかったのである。

文化が複雑になってくると、自由に飛びまわることが難しくなる。学校がどんどんグライダーを社会へ送り出すから、グライダーがあふれる。飛行機はグライダーにとって迷惑な存在である。創造性がやかましく言われ出したのは、わずかながら、これではいけないという反省が生まれつつあるのを物語っているとしてよかろう。ただ、まだ、本当の創造の方法はほとんど考えられていない。 F

『思考の整理学』　外山滋比古著　ちくま文庫

※　売家と唐様で書く三代目……三代目ともなると創業時の苦労など知るよしもなく、ぜいたくに慣れて商売をおろそかにし、やがて家業が傾き、家屋敷まで売りに出さなくてはならなくなるという意味。唐様とは中国風の文字ということで、文字までしゃれていることからもぜいたくに慣れ、商売をおろそかにしていたことをうかがわせる言葉。

問一　二重傍線部ア「ケントウ」イ「証拠」ウ「カンゲイ」について、カタカナは漢字で、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二　空欄（　a　）～（　c　）にあてはまる語の組み合わせとして最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

	a	b	c
ア	むしろ	だから	そして
イ	むしろ	そこで	しかし
ウ	そして	また	つまり
エ	そして	しかし	だから

問三　傍線部①「教え惜しみをする」とあるが、教え惜しみをされたものは「どのような考えをもつようになり、どのようになる」と言っているのか。本文中より該当する部分を六十四字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。（句読点も一字に含む）

問四　傍線部②「決して」の品詞の名称を漢字で答えなさい。

問五　空欄 Ⅰ に適する語を本文中より漢字三字で抜き出して答えなさい。

問六　空欄 Ⅱ に適する語を本文中より漢字二字で抜き出して答えなさい。

問七　傍線部③「漢文の素読が行なわれた」とあるが、素読はどのような点でいい教育だと言えるのか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　最高度の古典を、繰り返し朗誦することで上手に読めるようになり、教えてもらう準備が整ったことを先生に示すことができる点。
イ　字が読めなくても、ことばの意味を教えてもらうことで内容の奥深さに気づくことができ、最高度の古典をいつの間にか理解できるようになっている点。
ウ　字が読めない子どもであっても、朗誦させられることで次第に字が読めるようになり、わからなくても我慢して学習する必要性を実感できる点。
エ　難しい文章を意味も教えられずに朗誦させられることで疑問を抱くようになり、早く意味もわかるようになりたいという好奇心が誘発されていく点。

問八　傍線部④「孔子」と関係の深い作品を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　論語　　イ　孟子　　ウ　史記　　エ　西遊記

問九　傍線部⑤「いまの学校教育」とあるが、筆者はいまの学校教育のどのような点に疑問を感じているのか。筆者の考えにあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　教える側が積極的でありすぎると学習者は受動的になり、その結果依存心を育てることにつながってしまう点。
イ　与えられた問題の解答を出すということが自発、積極的に見えるため、思考力をつけると考えられている点。
ウ　自ら考える機会を与えられることで問題作成の力がつき、自発的な学習意欲が高まりやすい環境になっている点。
エ　学習者が疑問をいだく前に意味や背景を教えてしまうため、好奇心をはたらかせることができなくなっている点。

問十　本文中には次の一文が抜けている。この一文を補うのに最も適切な箇所を本文中の A ～ F の中から選び、記号で答えなさい。

意欲のないものまでも教えるほど世の中が教育に関心をもっていなかったからである。

総合

平成二十九年度　一般入学試験問題　国　語　解答用紙

一												
問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三			問二	問一		
						Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ		c	b	a

二												
問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三		問二	問一		
							最後	最初		ウ	イ	ア

科
科
受験番号
男・女
氏　名
得　点